

想像上のキャラクターと 子どもたちとの関係



室谷 幸吉

子どもら、ことに男の子にとって今は怪獣時代です。怪獣に明け怪獣に暮れる、といっている毎日です。ちょっと以前まではもっぱら怪獣図鑑・怪獣辞典・怪獣トイでした。それが現在は怪獣カード一色です。一人の子が怪獣カードを手に行っていると、おいしい物にハエがたかるようにワッと友だちが集まってきます。数十枚ものカードをさしこんだ怪獣アルバムを持っている子は王様みたいなものです。兄と妹で、カード集め競争をし、「きょう三枚ふえた」「カード付きのお菓子を買って」と手持ちの数を競いあっている例もわたしは知っています。「怪獣カードで泣く子もダマル」そんな時代ともいえそうです。

三歳のY君は、夕方になると、その時間を忘れずにテレ

ビにスイッチを入れ、ピタリとダイヤルを回します。何曜日の何時には何チャンネルでこれこれ……と、週間の番組をキチンと頭のなかに入れていて、ほとんど見のがすことはありません。口をポカンと開け、目をすえ、吸いこまれるようにテレビを見ています。今、怪獣がグロテスクな足を持ち上げ都会のビルをふみつぶし、電車をけとばしています。すごい迫力シーン！

「ビルや電車はみんなオモチャだよ。作りものだよ。あの怪獣だってホントは人間が中に入って動いてるんだよ」

Y君への強烈すぎるショックをおもんばかり、いっしょに見ていた父が解説を加えました。ところがY君は、憤然と、

「ちがうよ、ちがう」(玩具であったり、人間が化けてやっているんじゃない) そんな思い込みでキッパリ言い切りました。Y君は怪獣を実在する、と信じているのです。

わたしは今年の二月、七歳児を中心とした七十人ほどの子どもに、(怪獣が本当にいると思うか、いないと思うか) 問うてみました。東京の山の手に住む中流家庭で、男女を混じえた子どもたちは、圧倒的に「怪獣なんかいない」というのです。どうも五歳ごろまでは怪獣を実在視しており、それ以後徐々に非在視するものがふえ、八・九歳ごろにはほとんどが実在を否定するようになる……そんなふうで考えられます。多くの子は怪獣は作りものさ「チャックのついたぬいぐるみで、中に人が入って動いている」といいます。なるほど、日ごと日ごと、のべつまくなしの怪獣とのご面接では、見る子どもも肥え、対象への批判も厳しさを加えてくるでしょう。テレビに登場する怪獣にしても、こう数がふえ、製作費も切りつめて、となればゾンザイになるのも避けられません。チャックを見とがめられる破目にもなります。ドルゲ・ライドン・モンスタースターボード・エレキング・ゴリアス・ジャイロゲストと、100単位にもなる怪獣の名を、たてつづけに唱える怪獣博士、ああこのみこ

とな記憶力を漢字や算数に向けてくれたら、と願いはすれど、どっこい調子よく問屋はおろしてくれません。

いまひとつ、怪獣と張り合い、やつつけ役に回る超能力人がいます。スーパーマン・ウルトラマンです。怪獣と超能力人とでワンセットです。これらは今の大人たちが作り出して子どもらに与えた神話でしょう。暴力神 \parallel 荒御魂の代表が怪獣で、平和神 \parallel 和御魂の役割がスーパーマンだと考えたらどうでしょう。由来、人間は神話なしには生きられぬ生物です。神話に、人間の、民族の理想・祈念・願望などを反映させるのです。神話は時代とともに動かし、動いてもいいものだと思います。ところで今日の大人が子どもにプレゼントしつつある怪獣神話——わたしは多分にお粗末で、イメージも貧困だと思えます。もう少し上質で深い思想性に裏づけられたものが作れないのでしょうか。

「怪獣なんか作りもの、でも楽しくって——」という子どもらの割り切った身構えの奥に、いまひとつ、わたしは創造的なエネルギーを見いだします。

「マンガも(怪獣も) 大体話(の筋立て) がきまっていますツマンナイヤ」と、積極的にテレビに背を向ける子もいくらかいます。子どもの身うちに脈うつ健康な知的エネルギー

ギー、そうです。(与えられるだけでイージーにことを済ましている怠惰)をこのエネルギーでつきくずし、みずからが作り出していく姿勢に変えていくことです。子どもの知性・情意をゆたかにみがきこんだ気宇壮大な神話を、親も教師も、もちろん子どもも一つになって作りあげられたら、どんなにすばらしいことか。

怪獣づくのも、子どものエネルギーの反映です。このエネルギーを汲みあげ、未来を志向する創造者の身構えに変えていく、その知恵を、パイロットである指導者(教師や親)は持続しなければなりません。

「神」——この超越的絶対者を認めるかどうか。実在するかしないか。論は錯雑し、結着はつきましますまい。子どもは怪獣ほどには、日常生活レベルで「神」には付き合っておりません。それにかかわらず「神さま」というコトバを使わない子ども、またおりません。子どもの心に、自然に「神」が芽生え「神」がわかってくるのでしょうか。どうも神という意識や観念・概念は、大人からの刺激によって作られていくものようです。

神棚もなければ仏壇もなし、といった新世帯がふえつつ

あります。またたまにあっても過去の時代の家具視され、お守りをするのは年よりだけという家も珍しくありません。神信心、仏信心の親の姿を目にする子どもは圧倒的に少ないのです。家庭の中に宗教味が乏しいこの現象が、子どもの心を神に結びつけるかどうかに深く関わります。視覚ではとらえようのない神への関心や意識は、生活する場のふんい気や家族の日常行動から、心情という内面的な網によってすくい上げつつ育つものなのです。その心情の網でいくいとるべき魚そのものが見当たらなくなった、というのが今日大方の実情でしょう。無神論的家庭に無神論の子が育つのは理の当然です。若い母親による子捨て・子殺しがふえつつありますが、これなども宗教性を欠いた家庭と大いに関係があります。「子どもは神からの授かりもの」「人間はすべて神の子」という考えをもつなら子どもは惨酷に扱えません。世間では、世俗的な功利打算のダシに使われる似而非神がコロコロ肥っておりますが、魂の浄め手、命の救い主としてあがめられる神は本当に影薄くなりました。「神は死んだ」というよりは「神を殺した」現代人たちが、その風潮を正確に反映して子どもたちは「神さまなんかいるわけではない」と言い切るので、神の実在支持児は十年

前には94%（五―六歳児）いました。このたびの調査では75%（七歳児）にへつています。神の存在を信ずるのが幸せか不幸か。今それにはふれないとして、時代が、つまり身近な人たちのコトバや行動が、子どもを神に近づけ、あるいは逆に遠ざけもする事実を認めねばなりません。「悪いことをしたけれど、バチはあたらなかった」「ねがいごとをしたけど、きいてくれなかった」――だから神なんかいないと言いつける子どもたちからはじめて、神の存在に背を向ける多数の子どもたちが、それでは生涯にわたり神否定で通すか、そうではなくいつか神の肯定派に変わるか、これは個々人の心の秘奥に属することで、予見は無理です。ひとりひとりがその人にふさわしい曲折をたどり、あるいは神に接近し、あるいは神から遠ざかることでしよう。

神の心が「愛」に通ずるとしたら、神への深い思いや憧れを持つ人間は幸せです。神へのいざないを感じさせる家庭経営・幼稚園や学校の教育方法に熱意を向けねばならぬ理由がそこにあります。

カップ・鬼・雷さま・おぼけ・火の玉・天国・地獄・サンタクロース・人をばかす狐狸の類など、民族が生んだ想

像上のキャラクターは、過去になった長い時間の洗礼を受けて、ある物はその性格をいよいよきわ立たせ、ある物は多少変質しつつ、なお今日に生きつづけています。これらの想像上の性格者は、いいにつけ悪いにつけ、日本人の生活に複雑な色合いをあたえ、精神の深いところで相当な役割をにないつつあります。どの一つかをとり出して、たとえば「カップがいると信ずるのはいいか悪いか」を論じてもあまり意味はないでしょう。カップの存在を信ずるのがいいのでも悪いのでもありません。もつとも、度外れに強くオバケがいると信じ、そのために日常生活が普通に送れないとあつては困ります。病的になり生活が不順調にならぬ限り、信ずるも可、信じないも可でかまわないでしょう。しかしわが子が、あるいは集団としてクラス児が、精神の内面でどんな段階にいるのか、どのように想像上のキャラクターを理解しているのかを知るのは、その他の広範な子どもの心意活動に正当的確に対処するための、まことに有益有効なよりどころになるのです。

過日ある編集記者が来訪しました。記者の考えは、ちぢめていうと、「十年前の子どもに比べれば現在の子どもたちは、科学的文明がすこぶる進んだ社会に生きているのだか

ら、当然のことに架空なキャラクターについても強い否定的志向を持つのではないか」というのです。だから十年前の子どもらに、カッパの非在派が多くて（五・六歳児で60%）今の子どもらに肯定派がむしろ多い（七歳児で46%）のはへんではないか、というのです。へんなことはありません。実在・非在は対象に対する理解の深さ・批判する力の大きさによって微妙に揺れ動くものです。保育園や幼稚園で、また学校の教室で、学習集団として子どもらが平素、鋭い批判力や的確な思考力を身につけるような教育を受けているかどうかで、対象への対応状態がガラリと変わってくるのです。家庭生活の中で、より多くは学習群としての意図的教育を受ける中で、物の見方・感じ方・考え方をどのようににつちかかってきているかに着目する必要があります。カッパやおばけや火の玉・鬼など、教材として一定の場を与えられたものではありません。ですから、それらに対する子どもへの心的姿勢がまちまちなのは当然です。今ひとつ成績のいい子・頭のいい子は架空な絵そらごと人物を概して信じないであろうし、頭の弱い学習に遅れの目だつ子が信ずる傾向が強いであろう——こんなふうにならぬ人は考えるようです。しかしそんな図式は成り立ちません。むしろ

成績すぐれた優等生的な子は、大人の言うことをハイハイと聞き、物語の中味も（その通りその通り）とうなずきつつ受け入れ、万事に従順で肯定的です。そのためにおばけも天国もカッパも指し示される通りに肯定して受容する傾向が強いのです。それに対し、成績はすぐれなくとも活動的な子・生活的知恵にたちまざる子がどっかかというと、敵しい批判的姿勢を保ち、ヤミクモに信じないといった傾きが感じられます。